



◇第2回地域P&C活動事例研究交流会(村田武一郎)……1頁

◇地域づくりの現場からのオピニオン(豊原雅裕)……2頁

第2回地域P&C活動事例研究交流会

村田武一郎(理事長)

10月31日(土)、橿原市今井地区公民館2F講堂において、「第2回地域P&C活動事例研究交流会」を開催しました。もちろん、新型コロナウイルス感染症の感染予防対策を徹底したうえでの開催です。参加者は23名でした。熱のこもった講義・紹介・発表、活発な議論が行われました。

表 地域P&C活動事例研究交流会におけるテーマ・発表者等

種類	テーマ	講義・紹介・発表者(敬称略)
特別講義	地方創生 SDGs	中谷みさこ(第4期地域P&C)
地域P&C活動事例紹介	企業人とまちづくり	木本京子(第9期地域P&C)
	のせでんアートライン～里山振興～	大森淳平(第7期地域P&C)
	下市町の地場産業と地域との関わり	吉井辰弥(第7期地域P&C)
	ぐっと! 奥大和～映像でする地域おこし～	植田一宏(第5期地域P&C)
	「おいしい×うれしい地域づくり」をお手伝い	原田弘之(第2期地域P&C)
第13期地域P&C養成塾生中間発表	廃校カフェ～みんなの母校が甦る～	向井靖博 後岡道雄 松村貴史
	五感を通して学ぶ日本の文化～ほんまもん～	柴田三乃 中村伊都子 安藤優史 角田華子

「特別講義」の中谷みさこ氏は、SDGs(持続可能な開発目標)に関する世界・日本の取り組み状況、奈良県での取り組みが極めて低調であることなどを説明され、奈良県での取り組み強化の必要性を訴えられました。



「地域P&C活動事例紹介」では、まず、木本京子氏が、今井町のまちづくり活動への参画が、企業人としてのビジネススキルの向上にもつながっていることを紹介されました。次に、大森淳平氏は、落下傘型イベントではなく、地域が主体となってイベントを企画・運営することの重要性とそのための下支え機能の必要性を示されました。吉井辰弥氏は、疲弊している

地場産業にあっても、異業種の協力により、新たな地場産業の創出が可能であることを示されました。そして、植田一宏氏は、地域おこし協力隊員の制作による奥大和紹介映像を放映され、その制作過程が地域再発見に結びついたこと、地域づくり協力隊員のネットワークができたことを紹介されました。さらに、原田弘之氏は、NAEDのプランナーは地域を見る視点が、コーディネータは人を見る視点と人の話に共感する能力が重要であることを訴えられました。

「第13期地域P&C養成塾生中間発表」では、向井靖博氏・後岡道雄氏・松村貴史氏が、山添村の旧・東豊小学校を、集い・体験型観光・雇用創出の拠点とすることを目指して、まずは、地域の人たちが集えるカフェづくりから始めるという発表を行いました。柴田三乃氏・安藤優史氏・角田華子氏は、「つなぐ」をテーマとする奈良の観光振興、「また訪れたいと思う」奈良づくりに向けて、外国人の方々への「ほんまもんの日本文化体験」プログラムを提供する決意を示しました。この2件の発表には、先輩地域P&C諸氏から、計画づくり・実行に向けての多くの暖かいコメントが寄せられました。

特別講義を担当くださった中谷氏、活動事例を紹介くださった木本氏・大森氏・吉井氏・原田氏の、熱のこもった講義・紹介に感謝を致します。第13期地域P&C 養成塾生の今後のプロジェクト計画づくりに期待を致します。開催の準備・運営に関わってくださった方々にお礼を申し上げます。

地域づくりの現場からのオピニオン

豊原雅裕(地域P&C 第8期生)

1. 地域づくりには「理論と実践」のPDCAが重要



出所: 村田武一郎氏資料

地域づくりに取り組む基本姿勢として、『どの地域、組織にも、誰にも、「あの時、対応しておけば良かった」と、明らかになった時には、すぐに対応行動を始める必要がある。先送りは、「ユデガエル現象」へと移行し、破綻が訪れることを肝に銘ぜよ』と学んできました。「大変だ！大変だ！」という問題提起はとても大切なのですが、何が、どう大変なのか、先走り行動は、問題解決を難しくするのではないのでしょうか？

地域の諸課題について「現状問題点」「将来発展の基本方向」「発展のための具体策」をマトリクス表で「総合的・俯瞰的」に把握し、常にチェックしながら実践活動することが重要と考えます。場当たりの活動は長続きしません。

◎基礎知識・理論を学ぶ重要性

地域づくり活動は一過性のちよいと活動ではありません。ややもすると「グループを立ち上げよう」「何々法人にしよう」とする傾向があります。まずは先人・既存組織・基本組織を学ぶ必要があると考えます。私事例ですが、地域防災には「防災士」、「自主防災会」、地域資源活用には「観光ボランティアガイド」「金魚マイスター」「石垣の語り部」、「奈良まほろばソムリエ検定」「桜守の会」などで基本的な知識修得をさせていただいています。資格取得などは「基礎知識・理論を学ぶ」には不可欠と思います。広く浅い雑知識ですが、情報ネットワークの広がり寄与します。

◎実践することで分かってくるもの

諸課題に着手・実践に向かうと、必ずといってよいほど、縦組織の壁(行政内部の壁、管轄の壁、行政と民間団体の壁等)や横組織の壁(地域間の壁、諸団体の壁)、お金の壁などにぶち当たります。地域づくりにこころをこめて、これが最も厄介な問題かも知れません。「人がつくった壁」ですから、それぞれの「壁」の成り立ち・経緯を辿り学び検証することで解決方法が導き出せるようになると思います。既存の組織や歴史を学ばず現状否定し、新しいことに飛びつくのは労多くして功少ないと思われます。基礎理論を学び、そのうえでの実践活動といったPDCAが重要であると考えます。

平野のシンボル、金魚が泳ぐ城下町 大和郡山都市づくりアイデアササゲート事業

**家族みんなで
金魚を育てませんか？**

—金魚を飼う文化を広めよう—




オンラインで金魚の飼育をサポートします。

郡山金魚スクール生募集



募集期間
締切7月10日(金)まで

対象
大和郡山市内のご家庭で金魚飼育レポート提出が可能なオンライン環境のあるご家庭(小学生・初心者歓迎)

定員
50家族
(応募多数の場合は抽選となります。)

費用
無料
(金魚飼育セットを貸与します。)

申し込み方法
下記URLからメール、ファックスで(裏面に申込書があります。)お申込みください。
<https://koyama-kingyo-school.lindosite.com/>



スマートフォンで
募集に申込みます

(申込み個人情報は、目的以外に使用せずスクール終了後は責任をもちて廃棄させていただきます。)

主催：大和郡山市の金魚活性化グループ 協賛：大和郡山市 協力の：ジェックス株式会社 CORE for YAMATO-KORYAMA 奈良フェニックス大学

2. 活動報告「金魚活性化グループ」

奈良フェニックス大学地域研究科・金魚マイスター有志共働で大和郡山市の地域資源である「金魚を飼う文化を広めよう」をテーマに活動進行中です。郡山の金魚養殖産業は「平和な時代だからこそ金魚観賞が出来る」を理念に、300年の歴史があり、小学校の地域教育にも取り上げられています。一方、金魚産業は衰退傾向にあり、金魚を飼育する市民も少なくなっているのが、現状の問題点です。

「金魚はすぐ死んでしまう」「水換えなど飼育が面倒」「子ども飽き、大人

に負担」等々の阻害要因や仮説をたて、実際に金魚を飼育体験するなかで、飼育文化を広めるには、何が必要なのかを探ることを目的としました。2020年度、大和郡山市の「アイデアサポート事業」に応募・認定・助成金を受け活動しています。

小学生家族を主対象に、50組の家族を公募で選び(呼称:郡山金魚スクール)、水槽・金魚の幼魚を手配、スマホを活用し、オンライン「飼育サポート」や「飼育日記」の投稿というSNS活用により生の声を収集活動中です。新型コロナウイルス禍でのオンラインSNS活用は有意義であることも分かりました。

1ヵ月後のアンケートでは「半分近くの金魚が全滅した」という厳しい最初の壁に直面しました。事前の飼育説明会やオンライン相談で「命の教育」「病気初期対応」の話はしたものの、生徒さんにはショックな現象となりました。「金魚はすぐ死んでしまう」という問題を克服し、生存率向上には「事前の水づくり」「初期対応方法」「何故水質管理が必要なのか」についての分かりやすい飼育指導の必要性が分かりました。また、指導体制についても、養殖業者・飼育器具業者・販売業者・飼育熟練者の垣根を越え、共働で「金魚飼育は難しくない」啓発活動が必要なのも分かってきました。今後、生徒間コミュニケーション促進企画として「オンライン相談会」「写真展」を計画し、金魚を飼う文化を広めるための施策提案を行っていきます。

3. 奈良県に必要な喫緊活動—迫る危機: 防災・桜保全



地震防災について、「南海トラフ地震」への警戒が多方面で言われていますが、奈良県が直面する「奈良東縁断層地震」の危険性については県民の関心は非常に薄いと思われます。県のHPは平成17年版報告がいまだに掲載され、内陸型は人的被害想定4,500名以上、海溝型160~410名というデータが載っています。

発生確率も高く、その備えが必要です。奈良シェイクアウト(7月9日)も、新型コロナウイルス禍で見送られました。大和郡山市に至っては、自主防災組織率はピリに近く、「担当部署は、他の市は組織率数字は100%ですがね」との意識レベル。市役所・三の丸駐車場は耐震構造不備(市役所は現在改築中)といった状況です。地域別特徴を見ても、旧市街は狭く救急車両は入らず、古い建造物が入り混じっています。一度行われた市の一斉避難訓練も「避難所に行ったが市役所の人がない」「何して良いかわからなかった」などの不満が出て1回限りとなってしまいました。統一した行動が求められるのに、跛行状態が続いています。

発生確率も高く、その備えが必要です。奈良シェイクアウト(7月9日)も、新型コロナウイルス禍で見送られました。大和郡山市に至っては、自主防災組織率はピリに近く、「担当部署は、他の市は組織率数字は100%ですがね」との意識レベル。市役所・三の丸駐車場は耐震構造不備(市役所は現在改築中)といった状況です。地域別特徴を見ても、旧市街は狭く救急車両は入らず、古い建造物が入り混じっています。一度行われた市の一斉避難訓練も「避難所に行ったが市役所の人がない」「何して良いかわからなかった」などの不満が出て1回限りとなってしまいました。統一した行動が求められるのに、跛行状態が続いています。



桜保全問題でも、奈良県内では吉野・奈良公園・郡山城址が日本桜百選に選ばれていますが、いま他府県で被害拡大が懸念されている外来昆虫「クビアカツヤカミキリ」問題への対処が遅く遅れています。「県政なら」でも今春注意喚起されていましたが、バラ科植物である「桜」「桃」「梅」の被害が徐々に発見され、被害が拡大してきています。県の産業・観光資源であるこれらの樹木は危機に直面しており、早急な対応が必要で、まさしく「ユデガエル現象」状態となっています。大和郡山市でも桜に関係する団体や市の部署もあるのですが、こうした危機に向き合わず、桜植栽の所有管理区分の問題から対応に手をつけずにいます。県の指導待ち姿勢が現状です。クビアカツヤカミキリは自由に移動します。被害にあっている地域では市民に駆除への参加を呼びかけ、保全活動を行っています。被害が出てからでは遅いのです。

防災しかり、桜しかり、「ユデガエル県民」にならないため、次世代に禍根を残さないために、叡智を集め、誇れる地域づくりのために理論と実践がまさに求められている思います。